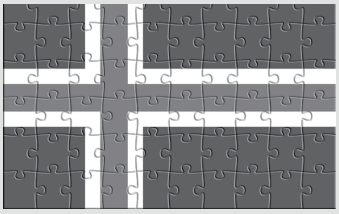

アイスランド 火山洞窟学会巡検報告

小堀 雄三 (KOBORI, Yuzo　パイオニアケイビングクラブ所属　神奈川県在住)

はじめに

日本洞窟学会の HP に、2002 年 9 月にアイスランドで開かれる国際火山洞窟学会の案内が掲載された。プログラムを見ると論文発表のほか巡検もたっぷりついている。個人で行ったのでは、観光洞でもない洞窟を探すのはまず不可能なので、この機会を逃すべからずと、早速申し込むことにした。

しかし、地質学の専門家でもない小生には発表すべき材料がない。しかも英語も満足に聞き取れない。断られてもともとと、アイスランド火山洞窟学会会長のシギーに broken English のメールで問い合わせたら、「論文発表なしでも全日程参加 OK」とやさしい英語で返事が返ってきた。日本からは本多 (火山洞窟学会)、小川 (火山洞窟学会)、小堀の 3 名が参加した。このレポートは巡検に参加したときの小堀の個人的な行動記録である。

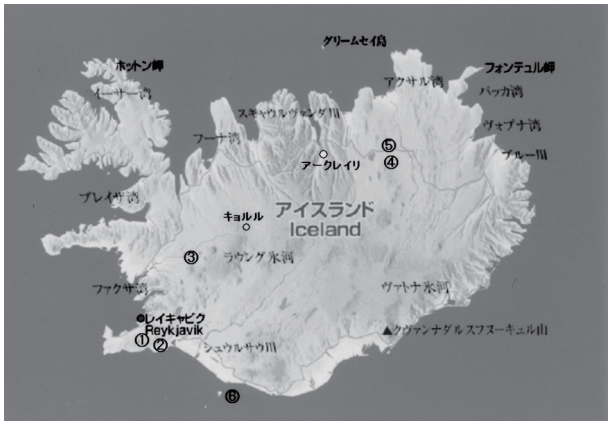

図 1　アイスランド全体図
① Leibarendi 洞 (二股洞窟)　② Arnahellir 洞 (見事な溶岩鍾乳)
③ Viobgelmir 洞 (天然ブリッジ)　④ Lofthellir 洞 (見事な氷結)
⑤クラフラ地熱地帯 (地熱発電所) ⑥ヘイマエイ島

二股洞窟

学会が開かれるレイキャビックのグランドホテルに着いたら学会の受付の女性が超美人なので見とれてしまい言葉が出てこない (写真 1)。初日は受付だけで午後から早速、付近にある溶岩洞窟の巡検。観光バス一台に乗り切れる程度なので参加者は 40 人ぐらいなのだろう。現地に着いたら洞窟の測量図が配布された。400m ほどの一本棒の洞窟なので、これなら迷うことはないと、すぐザックにしまってしまった。

写真 1　受付嬢

厚くコケが生えた溶岩流の平地を進む。まるでスポンジの上を歩いているようだ。溶岩流の一角が陥没したところに入口があった (写真 2)。溶岩洞の天井が崩落し、そこが入口になっている。溶岩洞窟ではよくあるタイプだ。他の参加者は専門家なので、途中にある溶岩鍾乳や天井の亀裂の方向を調べているが、小生はそれにはかまわず最奥まで進む。

写真 2　二股洞窟の入口

とくに面白いものもなかったので入口に引き返そうと、もと来た道を戻ったが、なかなか入口に達しない。もうとっくに入口に戻っていいはずなのだが。そうこうするうち洞窟も行き止まりになってしまった。「そんな馬鹿な」と思ったが、現実なのだからしょうがない。狐につままれた感じでまた引き返したら、前方に入口の明かりが見えてきた。

そこから外に出てみたら、正面にもう一つ入口がある。ザックから洞窟測量図を出してよく見たら、この溶岩洞は、上流側と下流側は一本の穴だが中央付近は二本に分かれていた。この二本に分かれた部分の一方の洞窟の天井が崩落して下流側と上流側に入口ができたのだ。溶岩洞が途中で二本に分かれ、また合流して一本になるという形態は非常に珍しい (図 2)。小生は下流側入口から入り、矢印のように歩いて、上流側入口から出てきたようだ。

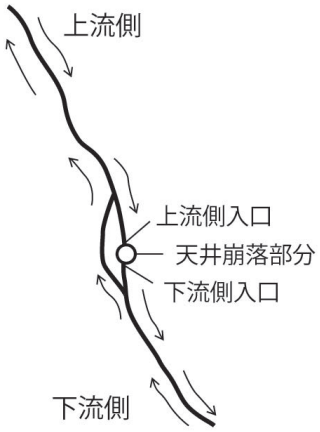

図 2　二股洞窟